

MD Anderson Cancer Center Breast Medical Oncology を見学して

東京大学医学部 5年 宮下浩孝

私は 2016 年 3 月 14 日から 18 日の間、上野直人先生のご厚意により、MD Anderson Cancer Center Breast Medical Oncology を見学させていただきました。以前より、日本での病院実習などを通して抗がん剤治療に興味を持っており、将来的にも抗がん剤治療のプロフェッショナルになりたいとおぼろげながら考えていた中、MD Anderson Cancer Center という、世界をリードするがん専門病院で見学をさせていただけたことは私にとって非常に大きな財産となりました。見学を通して感じたことをいくつかのトピックに分けて書かせていただきたいと思います。

・チーム医療

チーム医療という言葉は日本でもよく耳にする言葉ですが、大抵の場合「医療は多くの職種の人がかかわってなされるのだから、お互い尊重しあいましょう」程度に認識されていると感じていました。しかし、MD Anderson ではチーム医療がより体系的に、logical になされていました。外来診療では Nurse Practitioner, Nurse, MD などが日本よりもはっきりとした役割分担のもと、各々の役割をしっかりと果たしているように感じました。また、そのチーム医療の根幹を支える theory についての講義もなされており、チームとしてのパフォーマンスに対する関心が日本に比べると高いように感じました。日本とアメリカでは文化的な差異があり、MD Anderson のやり方をそのまま真似することは難しいかもしれませんが、チーム医療についての「理論」を意識することは日本の医療を向上させうると感じました。

・ multidisciplinary での外来診療

乳癌の治療は手術、化学療法、放射線療法を組み合わせで行われることが多いですが、MD Anderson では今後の展望を患者さんとディスカッションするにあたって、breast surgical oncology, breast medical oncology, radiation の MD たちが代わる代わる一対一で患者さんと話していました。患者さんにとっては、自分が受ける治療一つ一つについて専門家に説明してもらえることは、安心感につながり、治療者に対する信頼感も生まれると思います。日本では一人の外科医が全体的な治療を決め、化学療法や放射線療法は他科コンサルトという形で、あるいは自分でやってしまうことが多いと思います。ずっと同じ医者に診てもらえるという安心感はあるでしょうが、人によっては全ての治療プロセスをそれぞれの専門家にやってもらいたいと感じる患者さんもいるでしょう。これも患者と医療者との関係という文化的な要素が影響する部分ではありますが、それが患者のためになるならば、日本でも multidisciplinary での外来診療をやってみる価値はあると感じました。

・患者と医療者との関係

今回の見学でもっとも印象に残ったのは患者と医療者の関係が日本とは大きく異なるということでした。日本では基本的には、診断法や治療法に関して医療者が説明して、患者さ

んは医療者の説明の中で「分からないこと」を質問するというような形で診療がなされています。MD Anderson では多くの患者さんがしっかりとインターネットなどで自分の疾患、診断法、治療法について調べてきており、医療者の話を聞きに来るというよりむしろ、ディスカッションをしに来ているというような印象でした。「この治療法を試したい」「この治験に参加したい」「どうしてその検査をする必要があるのか」などの、日本で言われると一瞬ひるんでしまうような発言がしょっちゅうなされていました。また、これはアメリカ人と日本人の性格の違いというよりは、外来診療という場の作り方の違いによるものだという事もわかりました。具体的には、質問をするのは良いことであるという雰囲気を作っていること、また医療者は質問を歓迎しているという姿勢を見せること（医者と直接コンタクトをとれる連絡先を渡す）などが実践されていました。

日本のやり方と MD Anderson のやり方でどちらのほうの方が優れているとか判断するのは非常に難しいですが、少なくとも MD Anderson では患者さんが納得しないまま治療が行われているということはほとんどないように見えました。

・日本の医学部出身者がアメリカで医療を行うということ

日本で生まれ育った人間が異国で暮らしながら働くにはそれなりの苦勞は避けて通れないものだと思います。日本の医療システムは世界的に見て明らかに劣っているわけでもないのに、苦勞を感じながらアメリカで働くことを選ぶ理由は、アメリカでしかできないことがあるからにほかなりません。例えば、大規模な前向き臨床試験は日本よりもアメリカのほうが行いやすい環境にあると思います。私は将来的にはがんの研究に携わり、がん診療の進歩に貢献したいと考えておりますが、正直なところどのような研究をしたいかはまだ決められていません。これからしっかりと考えた上で将来の展望を具体化させていきたいと思っています。

・最後に

今回、このような貴重な経験をさせていただいたのは、ひとえに上野先生のご厚意によるものです。医学に限らず学問というのは、長い人類の歴史の積み重ねであり、自分だけ活躍すればいいのではなく、後進を育て、学問としての発展を目指すことが必要不可欠だと思います。多くの方の mentor となり、多くの見学生を受け入れ、それを実践なさっている上野先生の姿は非常に尊敬でき、私の目標となりました。MD Anderson で働いている皆さんも、システム改編という大変な時期にもかかわらず、見学生に非常に親切にいただき、非常に勉強になりました。

今回の経験を自分の将来、ひいては学問の発展につなげられるようにたゆまず努力を重ねてまいります。ありがとうございました。